SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

e-Learningによる日本語の語彙学習の履歴分析：聴解学習との比較の観点から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 愛知教育大学大学院・静岡大学大学院教育学研究科共同教科開発学専攻 公開日: 2013-08-21 キーワード (Ja): 日本語教育, e-Learning, 自主学習, 学習履歴, 語彙学習 キーワード (En): e-Learning, ALC NetAcademy2, listening, vocabulary, Autonomy 作成者: 稲葉, みどり メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/7416

【 論文 】

e-Learning による日本語の語彙学習の履歴分析

－聴解学習との比較の観点から－

稲葉　みどり

愛知教育大学（日本語教育講座）

要約

本研究では e-Learning による日本語の語彙コース（ALC NetAcademy2）の学習において、受講生（留学生）が授業内・授業外でどのように取り組んだかを学習履歴の分析を通じて考察する。この e-Learning は教師の管理下での一斉教室学習と教室外での自律的学習を組み合わせた形態で実施した。コース全体の学習時間、授業内・授業外での学習時間、授業の指定ユニット・指定外ユニットの学習履歴等を日本語レベル別、個人別に分析した結果、以下のことが明らかになった。語彙コースの総学習時間は聴解コースよりも長い。総学習時間が一番長いのはレベル I である。授業外学習時間が一番長いのもレベル I である。レベル I は授業内より授業外の自主学習時間の方が長い。指定外ユニットの学習は聴解コースよりも頻繁かつ長時間行われている。全体的特徴は、学習時間の長い人と短い人、自主学習した人としない人がレベルを超えて全体に分布していることである。よって、この語彙コースの学習はレベルに関わらず興味をもった分野を選択して自由に取り組めることが受講生の学習を幾分ではあるが促進したと考えられる。

キーワード

日本語教育、e-Learning、自主学習、学習履歴、語彙学習

1.　e-Learning による外国語学習

1.1　研究の背景

オンラインによる外国語学習には、様々な内容、目的、形態（tutorial CALL、social computing CALL、CALL gaming 等）のプログラムがあり、これらを効果的に導入すれば学習効果が上がることが期待されている。特にインターネット等のメディアを媒体とした e-Learning は広く行われるようになった。愛知教育大学でも e-Learning による外国語学習システム（ALC NetAcademy2）[1]が平成 23 年度から本格的に導入され、英語教育の分野で活用されている。

このシステムを導入した英語教育については、試行段階も含めて様々な角度から活用法や効果に関する研究が行われている。例えば、小川（2011）は、自主学習としての e-Learning システムの利用や効果を検証している。小川・藤原（2011)では、大学生の英語学習における学習者自律度と他者依存度を明らかにしている。藤原・小川(2011)は、TOEIC スコアに与える個人差要因の影響として外発的動機づけ、授業外英語学習の効果を追究している。田口（2012a; 2012b）は自主学習と自律学習に関する研究を行っている。江口(2012) は e-Learning における自主学習態度や学習の質の重要性を説いている。これらは TOEIC の得点を上げるための主に日本人大学生を対象とした e-Learning に関する研究であるが、留学生を対象とした本研究の着想の契機となった。

このシステム（ALC NetAcademy2）の中には日本語学習プログラムも含まれている。本研究では、この中の日本語コースを留学生の日本語教育に導入して実践した授業「日本語ネットアカデミー2011」における受講生の学習への取り組みを考察し、今後の効果的な導入法、活用法に関する示唆を得ることを目的とする。

1.2　研究の目的と課題

オンラインによる外国語の学習は、導入方法や利用方法により学習者の取り組みや学習の成果は必ずしも同じではない。例えば、学習システムやプログラムを対面式授業と上手に組み合わせることで効果が高まることもある（Blake, 2011）。e-Learning のというのは、本来学習者が自主的、自律的に学習に取り組み、授業時間等に拘束されないで学習できることが利点の 1 つと考えられる。一方、学習者への依存度が高く、教師不在で継続的に学習を進めることは必ずしも容易ではない。

そこで、この授業では決まった時間にパソコン教室に集まり、教師の管理下で e-Learning プログラムに沿って

一斉学習する「授業」と教室外での自律的学習を推奨する形態を組み合わせて進めた。本稿では、受講生が授業内外でこのシステムを利用して e-Learning にどのように取り組んだかを明らかにする。聴解コースの学習については稲葉（2013 印刷中）で分析したので、ここでは語彙コースの学習について、以下の手順で考察する。

まず、授業期間内の総学習時間、学習回数等をレベル別、個人別に分析し、語彙コースの全体的な学習状況を把握する。次に、授業時間内での学習（授業内学習）と授業時間外での学習（授業外学習）の時間を分析し、授業内外での学習への取り組みを明らかにする。授業外での学習は自主学習[2]と考える。さらに、授業で指定したユニット（指定ユニット）の学習、及び、授業で指定しないユニット（指定外ユニット）の学習履歴を調査する。指定外ユニットの学習は興味をもって取り組んだ自主学習と考える。最後に、語彙コースの学習状況を聴解コースの学習状況[3]と比較する。

2.　先行研究

2.1　オンラインラーニングと対面式授業の比較

伝統的な対面式授業（face-to-face）は、教授法、クラス規模、生徒の適性や個性、教師の資質、学習環境等を勘案して様々な方法で実践できる。また、生徒とのインタラクションも自由で、柔軟性に富んでいる点が特色である。オンラインラーニングにおいても、多様なフォーマットのプログラムやパソコン技術等を利用して多彩な教え方や学び方ができる。メディアを利用して伝統的な方法ではできなかった学び方が可能で、学習する時間や場所に拡張性があり、利便性が高い。

オンラインラーニングに関しては、特色、利用法、導入方法を考察した Blake (2008; 2009) の研究や第二言語習得との関わりに着目した Chapelle (2008; 2009) の研究等がある。その効果を直接検証した研究は少ないが、Blake et. al (2008)では、オンラインのみの学習、対面式授業による学習、両方を用いたブレンディド学習における口頭言語能力を測定、比較している。

Blake (2011) は、オンラインコースのみで学習した人、オンラインコースと伝統的な対面式授業の両方で学習した人、伝統的な対面式授業の環境のみで学習した人の学習成果を比較し、オンラインコースと対面式授業環境で学習した人の一番成績が良く、オンラインコースのみの人も対面式授業環境だけの人よりも成績が良いことを報告している。

しかし、Blake (2011) は、オンラインラーニングは対面式授業よりも幾分多くの利益を提供するが、学習成果はタスクに取り組んでいる時間と密接に関わっており、オンラインラーニング環境における学習の効果とは言い切れない。オンラインコースで自主的に多くの時間学習した人が対面式授業だけの人より成果が上がるのは特に驚くべきことではなく、タスクに取り組む時間の長さが学習成果を上げる一番の決め手となっていると主張している。そして、対面式授業と比べてタスクに取り組む時間を自分でコントロールできることがオンラインラーニングの唯一の重要な付加価値だと結論づけている。

さらに、Blake (2011) は、オンラインラーニングは対面式授業に比べて時間的な融通が利きやすい。メディアを利用することで学習者に興味や刺激与え、学習（タスク）を長く継続させることができれば、結果的に学習を促進できると指摘している。

2.2　ALC NetAcademy2 のプログラム評価

ALC NetAcademy2 は、アルク教育社の公式ホームページ[4]によると、2011 年 9 月現在全国 400 以上の教育機関、国立大学の約 80％で導入され、自律学習、授業利用、遠隔学習、入学前教育等に広く活用されている。佐藤(2012)では、東北大学の全学対象日本語教育プログラムに 2005 年度に ALC NetAcademy [5]の日本語コースを導入した際の利用状況と利用者を対象としたアンケート（「イントラネット学習支援プログラムに対する利用者の評価」； 佐藤他, 2007）の結果を紹介し、同教材の効果的な利用法を提示している。

調査から、いつでもどこでも使えて日本語授業に参加する時間的余裕がない留学生には有用、自律学習に便利、内容が豊富、テストや学習履歴閲覧機能が役立つ等が利点で、プログラムの必要度、利用者の満足度は高いことを明らかにしている。また、学習時に問題があれば対処できるように対面授業とのブレンディド・ラーニングを行うことがよい、もっと使う機会があればよい、映像、動画を入れたコンテンツに拡充を望む、国へ帰っても使いたい等のコメントや要望を紹介している。今後の効果的な利用法として、プレースメントテスト（レベル判定試験）、来日前、離日後の日本語学習支援などへの活用の可能性を提案している。

小塚 (2012) は、このシステムは聴解教材の再生の際、音声スピードが変えられる、読解速度が計測できる、シャドーイングができる等の点で通常の紙媒体教材や音声 CD 教材では実現が難しい機能を多く有し、同じシステムを導入している他大学の利用者からも概ね高い評価を受けていることを報告している。この研究は主に英語コースを基にしたものであるが、日本語コースもほぼ同じ形式のプログラムであり、このシステムの評価は高く、本実践に取り入れるのに妥当であると考えられる。

2.3　語彙コースのコンテンツ開発

語彙コースのコンテンツとシステムの開発に関しては佐藤他 (2005) で詳述されている。それによると、この語

彙コースは日本の教育機関で学ぶ日本語学習者を主対象とし、彼らが社会生活・学校生活・学生生活を送る上で必要と考えられる基本的語彙 3000 語を習得することを目標として設計されたものである。学習レベルは初級から上級までに対応し、特に初級後半から中級まで（日本語能力試験 4～2 級程度）の学習者が使用の中心となることが想定されている。日本語の入門段階を終え、初歩的な文字の知識と基礎文法を身につけた学習者が、授業中や授業と並行して利用したり、自習として活用すれば生活の様々な場面で実際によく使われる語彙を効果的に習得できるように工夫されている。よって、この語彙コースは本実践授業の受講生に適した内容と考えられる。

2.4 「日本語ネットアカデミー2011」の関連研究

日本語ネットアカデミー2011（以下「授業」）は、アルク教育社の ALC NetAcademy2 の日本語コースのプログラムを利用した e-Learning の授業である。教師の管理下で e-Learning に取り組む形態で、平成 23 年度 10 月～12 月に実施した。毎週 90 分 2 回、合計 8 週間、合計 16 回（ガイダンス・期末テスト・評価を含む）行った。週 2 回の授業は情報処理センターのパソコン室で行い、併せて授業外での自律的学習を推奨した。

稲葉（2012b）では「日本語ネットアカデミー2011」の授業実践を紹介した。授業の概要では、語彙、聴解、読解、文字、日本語能力試験ミニテストの各コースの練習内容、授業で選択した学習コンテンツ、コース開始時点で行った学習希望調査の結果、授業をサポートする日本人チューターの配置などの詳細を記述した。

また、5 つのコース全体の学習時間・学習回数、コース別の学習時間・学習回数等に関して受講生の学習履歴を分析し、受講生の取り組み状況の観察、学習履歴の分析から、学習には様々なスタイルがあること、自分に合った学習ストラテジーを見出すこと、授業中の質疑応答、教師の声かけ等が学習意欲を高めること、テストと評価は達成感を与えること等の知見を得た。また、プログラム内容に関する意見、感想、要望等を話し合うことを通じて、受講生は自分に必要な学習内容や到達目標を明確にできたことを報告した。

稲葉（2013 印刷中）では、この授業の聴解コースの学習に焦点を絞り、全体の学習時間・回数等、授業内・授業外での学習時間・回数等、指定ユニット・指定外ユニットの学習時間・回数等について受講生の学習履歴をレベル別、個人別に分析し、以下の結果を得た。

聴解コース全体の総学習時間は、平均値でみるとレベル I [6]が一番長いが、個人別にみると総学習時間が非常に長い人（全体の最大値）、逆に非常に短い人（全体の最小値）が見られ、学習取り組みへの差異が大きい。これに対して、レベルⅡの受講生は総学習時間、学習回数等の値の差が小さく、比較的類似した学習状況が見られる。

授業内の学習時間が一番長いのはレベルⅡで、授業外の学習時間が一番長いのはレベル I である。レベル I では授業外の学習時間の方が長い受講生が多い。これに対して、レベルⅡの授業内学習時間は一番長いが、授業外学習時間は短い。

指定ユニット・指定外ユニットの学習時間をみると、レベル I は指定ユニットだけ学習した人が大半であるが、かなり長時間自主的に学習した人もいる。レベルⅡは指定外ユニットをある程度学習した人が大半であるが、概して指定外ユニットの学習への自主的な取り組みは多くない。ただし、これらの結果はこの授業に参加した受講生の集団が教師の管理下で、この学習システム（ALC NetAcademy2）を使って聴解コースを学習した場合についてのみ言えることである。

3. 研究の方法

3.1 語彙コースの内容と授業の進め方

ALC NetAcademy2 の語彙コースは、日本語能力試験（1～4 級）を参考に精選した重要語彙 3,000 語（10 語×300 ユニット）で構成されている。この中から受講生に有用で、かつ、未習と予想される 11 ユニット[7]（「ごみ／調味料／調理動詞／食事動詞／味形容詞／交通動詞・形容詞／住居位置／薬品／健康／金銭／家庭経済動詞」）を選び、学習指定ユニットとした。これ以外に学習を推奨する 4 ユニット[8]を加えた。

語彙のコースは、ワードマッチ、カナマッチ、サウンドマッチ、スペルアウトと呼ばれる 4 種類の形式の練習で構成され、単語の意味、発音、表記、漢字の読み等を、練習やクイズ[9]を通じて学習する仕組みである。プログラムでは英語、中国語の対訳を選んで利用することができる。1 ユニットの学習時間の目安 10～20 分である。

この授業では、授業内での一斉学習[10]を基本とし、授業では毎回指定したユニットの学習に取り組み、授業の最後に練習した箇所の確認テスト（online）を受けて終了する形式をとった。授業学習では語彙と聴解の学習を優先的に行うが、余り時間や授業外では、授業学習で指定してないユニットや読解、文字、日本語能力試験ミニテストのコースに取り組むことを推奨した。授業外での学習については特に学習ユニット等の課題は出さなかった。よって、授業外での学習は自主的な活動と考える。

次の授業学習の始めに前回の学習箇所の教師作成の復習テスト（online）を実施した。教師が作成した聴解クイズをプログラム上に公開し、該当する日の授業時間内に受けられるように設定した。採点も自動ででき、結果も記録される。8 週間の授業学習の後に語彙と聴解の学習内容全域の期末テストを実施した。

3.2　受講生一覧

受講生は愛知教育大学の日本語科目受講生（特別聴講学生）と日本語補講受講生（教員研修留学生・学部研究生）合計 13 名である。レベルは初中級（レベルⅠ）5 名・中級（レベルⅡ）6 名・中上級（レベルⅢ）2 名、合計 13 名である。表 1 は受講生の出身国・地域、渡日時期の一覧にしたものである。

表 1：日本語ネットカデミー2011 の受講生一覧

受講生番号	レベル	国・地域	渡日時期
S-1	Ⅰ	エジプト	2010.10
S-2	Ⅰ	スーダン	2010.10
S-3	Ⅰ	ドイツ	2011.10
S-4	Ⅰ	ミャンマー	2010.4
S-5	Ⅰ	韓国	2011.4
S-6	Ⅱ	台湾	2011.10
S-7	Ⅱ	台湾	2011.10
S-8	Ⅱ	タイ	2011.10
S-9	Ⅱ	タイ	2011.4
S-10	Ⅱ	タイ	2011.4
S-11	Ⅱ	米国	2011.10
S-12	Ⅲ	台湾	2011.10
S-13	Ⅲ	中国	2011.4

3.3　学習時間の定義と履歴の分析方法

アルク教育社の ALC NetAcademy2 の日本語コースのプログラムでは、学習者の学習履歴の詳細が記録され、授業（コース）の管理者はいつでも学習履歴を閲覧できる。学習履歴とは、学習コース、学習ユニット、学習日時、学習開始時刻、学習終了時刻、学習時間、学習ステップ、取り組み状況（チェックしたパート、学習時間等）、クイズの正誤、確認テスト結果他である。履歴は個人別、クラス別等の集計も可能である。

学習時間は学習開始時刻から終了時刻までのコンピュータープログラムへアクセスした時間で計算される。ここではこのアクセスした時間を学習時間と定義することにする。厳密に言えば、アクセスしていても学習していない時間が存在する可能性はある。特に授業外での自室における学習等では、途中でお茶を飲んだり、中座したりすることもあり、この可能性は否めない。しかし、学習履歴では時間の他、学習ユニットや各ステップへの取り組み、クイズの正誤等が詳しく記録されているので、必要に応じて参照して考察を進める。

4.　語彙コース全体の学習状況

まず語彙コース全体の学習状況（学習時間、学習回数、1 回の学習時間）に関してレベル別の傾向、個人別の特徴、聴解コースの学習状況（稲葉, 2013 印刷中）との比較を中心に考察する。表 2 は受講生の語彙コースの授業期間内の学習時間の合計（総学習時間）、学習回数の合計（総学習回数）、1 回あたりの学習時間をレベル別に集計して 1 人当たりの平均値を算出したものである。

表 2：語彙の総学習時間（レベル別）　（時間:分:秒）

レベル	総学習時間	総学習回数	1 回の時間
Ⅰ	5:52:41	31.2	0:11:18
Ⅱ	5:30:43	49.5	0:06:45
Ⅲ	4:19:52	35.0	0:07:45

総学習時間は、レベルⅠが一番長く[5:52:41] [11]で、続いてレベルⅡの[5:30:43]、一番短いのはレベルⅢ[4:19:52]であるが、レベル間の差はあまり大きくない。総学習回数はレベルⅡが 49.5 回で一番多く、レベルⅠが 31.2 回で一番少ない。1 回の学習時間はレベルⅠが一番長く、[0:11:18]で、レベルⅡが一番短く [0:06:45]である。

聴解コースの学習[12]では、レベルⅠの総学習時間が他のレベルと比べて非常に長く（レベルⅢの約 2 倍）レベル間の差異が非常に大きいが、語彙コースでは 3 レベル間の総学習時間にあまり差がない。1 回当たりの学習時間が一番長いのがレベルⅠである点、総学習回数が一番多いのはレベルⅡである点は両コースで類似している。

次に個人の特徴をみる。表 3 は受講生別の語彙コースの総学習時間、総学習回数、1 回あたりの学習時間を表している。全体平均をみると、総学習時間が[5:28:16]、総学習回数は 40.2 回、1 回の学習時間は[0:08:39]である。聴解コースの結果[13]は、総学習時間が[3:00:19]、総学習回数 25.2 回、1 回の学習時間が[0:07:20]である。よって、語彙コースの方が総学習時間、1 回の学習時間共に長い。

表 3：語彙の総学習時間（個人別）　（時間:分:秒）

受講生番号	総学習時間	総学習回数	1 回の時間
S-1	5:14:45	26	0:12:06
S-2	9:39:31	28	0:20:42
S-3	5:42:28	27	0:12:41
S-4	8:01:03	58	0:08:18
S-5	0:45:37	17	0:02:41
S-6	6:55:18	61	0:06:48
S-7	6:35:54	56	0:07:04
S-8	3:54:11	42	0:05:35
S-9	4:00:52	60	0:04:01
S-10	2:51:49	23	0:07:28
S-11	8:46:11	55	0:09:34
S-12	4:57:40	45	0:06:37
S-13	3:42:03	25	0:08:53
平　均	5:28:16	40.2	0:08:39

個人別にみると、総学習時間が一番長いのは S-2 の[9:39:31]である。この受講生の学習回数は 28 回で平均値より低い。しかし、１回の学習時間は[0:20:42]で、平均を大きく上回る。よって、１回の学習にじっくりと取り組んだと思われる。次に総学習時間が長いのが S-11 の[8:46:11]である。総学習回数は 55 回で平均を上回る。1 回の学習時間は[0:09:34]である。S-4 も総学習時間が[8:01:03]、総学習回数は 58 回、1 回の学習時間は[0:08:18]で S-11 と近い値を示している。これらの受講生も語彙コースにかなり時間をかけて取り組んだと言える。

総学習時間が一番短いのは S-5 の[0:45:37]である。学習回数は 17 回で、1 回の時間は[0:02:41]と非常に短い。各回の学習時間の履歴を参照したところ、17 回中 8 回はアクセス時間が 1 分未満で、閲覧のみに近い状態である。この受講生は聴解コースにおいても総学習時間、総学習時間、1 回の学習時間等が受講生中の最低値で、利用が少ない。この受講生は授業登録したが他の授業と重なり欠席が多かったためである[14]。

全体の傾向をみる。レベル I には総学習時間の長い受講生が多い。5 人中 4 人が 5 時間以上である。1 回の学習時間は長く、5 人中 4 人が平均値 8 分以上である。総学習回数が非常に多い受講生(S-4)もいる。一方、総学習時間が一番短い受講生(S-5)もあり多様である。レベルⅡも差異が大きく多様で、レベル I 以外は比較的類似した傾向を提示した聴解コースと異なる。

5.　授業内学習と授業外学習の分析

5.1　レベル平均からみた傾向

ここでは、受講生の語彙コースの授業時間内での学習時間と授業時間外での学習時間をレベル別に分析する。授業時間外での学習は自主的な学習と考え、受講生がどの程度授業内外で学習に取り組んだかを明らかにする。さらに聴解コースの場合[15]と比較する。

表 4 : 語彙の授業内・授業外学習時間（レベル別）

（時間:分:秒）

レベル	授業内 総学習時間	授業外 総学習時間	合計時間
I	2:04:00	3:48:40	5:52:41
Ⅱ	4:51:43	0:38:59	5:30:43
Ⅲ	3:14:15	1:05:37	4:19:52

表 5 : 語彙の授業内・授業外学習回数（レベル別）

レベル	授業内 総学習回数	授業外 総学習回数	合計回数
I	22.6	8.6	31.2
Ⅱ	41.5	8.0	49.5
Ⅲ	27.5	7.5	35.0

表 4 は受講生の授業期間中の語彙コースの授業内での総学習時間、授業外での総学習時間、総学習時間の合計（合計時間）をレベル別に集計して 1 人当たりの平均値を算出したものである。表 5 は受講生の授業期間中の語彙コースの授業内での総学習回数、授業外での総学習回数、総学習回数の合計（合計回数）をレベル別に集計して 1 人当たりの平均値を算出したものである。

レベル別に傾向をみる。レベル I の授業内の総学習時間（表 4）は[2:04:00]であるが、授業外の総学習時間は[3:48:40]で、合計時間[5:52:41]の約 3 分の 2 を授業外で学習している。総学習回数（表 5）をみると、授業内が 22.6 回、授業外が 8.6 回で、授業内の約 2 倍である。よって、レベル I はかなり自主的に学習をしたと考えられる。この傾向は聴解コースの学習でも見られる。

レベルⅡの授業内の総学習時間は[4:51:43]、授業外の総学習時間は[0:38:59]である。レベルⅡは、授業内に比べると授業外での学習時間は少ない。総学習回数は、授業内が 41.5 回、授業外が 8.0 回で、授業内の約 5 分の 1 である。よって、レベルⅡは授業時間内に集中的に学習したと言える。聴解コースの学習でも類似の傾向が見られる。

レベルⅢの授業内の総学習時間は[3:14:15]、授業外の総学習時間は[1:05:37]である。授業内の総学習回数は 27.5 回で、授業外の総学習回数は 7.5 である。レベルⅢは聴解コースにおいては授業外の学習時間がゼロで、全く学習していないが、語彙コースでは 1 時間以上学習しており、この点が異なる。

次にレベル間の比較をする。授業時間内での総学習時間（表 4）は一番長いのがレベルⅡの[4:51:43]である。次がレベルⅢの[3:14:15]で、一番短いのがレベル I の[2:04:00]である。各レベルの授業時間内での総学習回数（表 5）は、一番多いのがレベルⅡの 41.5 回である。次がレベルⅢの 27.5 回、一番少ないのがレベル I の 22.6 回であるが、レベルⅡとⅢの差は小さい。

聴解コースの授業内学習時間[16]は、レベルⅢはレベル I の約 2 倍、レベルⅡは約 3 倍の時間で、レベル間の差が非常に大きいが、語彙コースの場合の差異はこれに比べると小さい。学習回数[17]の観点からみても、聴解コースのではレベルⅢはレベル I の約 2 倍、レベルⅡは約 3 倍の回数で差が大きいが、語彙コースの学習の場合はレベル間の差が小さい。

各レベルの授業時間外での総学習時間（表 4）は、一番長いのがレベル I の[3:48:40]で、次がレベルⅢの[1:05:37]、一番短いのがレベルⅡの[0:38:59]である。レベル I の授業外の総学習時間はレベルⅡの約 6 倍、レベルⅢの約 3 倍で、非常に長く、差が大きい。各レベルの授業時間外の総学習回数（表 5）は、一番多いのがレベル I の 8.6 回、次がレベルⅡの 8.0 回である。一番少ないの

がレベルⅢの 7.5 であるが、レベル間の差は小さい。

聴解コースの授業外の総学習時間[18]は、レベルⅠが特に長く、次がレベルⅡ、レベルⅢはゼロである。総学習回数[19]は、レベルⅠが一番多く、レベルⅡの 3 倍以上である。よって、レベルⅠの学習時間が特に長い点は類似しているが、語彙コースではレベルⅢの授業外学習が行われている点が異なる。

5.2　学習タイプからの考察

ここでは、授業内の学習時間と授業外の語彙コースの学習時間について、受講生一人ひとりの履歴を基にその特徴を考察する。さらに、聴解コースの場合[20]と比較する。ここでは受講生を 3 つのタイプに分類[21]する。授業外での学習時間がゼロの人を「主に授業時間内で学習した人」、授業外の学習時間の方が授業内の学習時間よりも長い人を「主に授業時間外で学習した人」、授業内の学習時間の方が授業外の学習時間よりも長い人を「授業時間内と授業時間外の両方で学習した人」と定義することにする。

表 6 は授業期間中の受講生個人の語彙コースの授業内での総学習時間、授業外での総学習時間、及び、総学習時間の合計を表している。

表 6：語彙の授業内・授業外学習時間（個人別）

（時間:分:秒）

受講生番号	授業内 総学習時間	授業外 総学習時間	合計時間
S-1	0:09:04	5:05:41	5:14:45
S-2	3:19:03	6:20:28	9:39:31
S-3	5:42:28	0:00:00	5:42:28
S-4	0:23:50	7:37:13	8:01:03
S-5	0:45:37	0:00:00	0:45:37
S-6	6:55:18	0:00:00	6:55:18
S-7	6:17:35	0:18:19	6:35:54
S-8	3:54:11	0:00:00	3:54:11
S-9	3:37:11	0:23:41	4:00:52
S-10	2:51:49	0:00:00	2:51:49
S-11	5:34:15	3:11:56	8:46:11
S-12	3:47:04	1:10:36	4:57:40
S-13	2:41:26	1:00:37	3:42:03
平均	3:32:13	1:56:02	5:28:16

まず、「主に授業時間内で学習した人」として、5 人の受講生（S-3、S-5、S-6、S-8、S-10）が挙げられる。これらの受講生の授業内での学習時間には差異があるが、授業外学習時間はゼロで、授業時間内のみで学習に取り組んだことを示している。聴解コースでもこのタイプに分類されたのは、S-3、S-8、S-10 の 3 人で、語彙、聴解コースの両学習において主に授業内のみで学習したことを示している。

次に「主に授業時間外で学習した人」は、受講生 S-1、S-2、S-4 の 3 人である。S-1 の場合は、合計[5:14:45]のうち [5:05:41]を授業外で学習している。授業への出席回数は少ないことが原因と考えられるが、授業外では学習している。S-2 の場合は合計[9:39:31] のうち、[6:20:28]を授業外で学習している。S-4 の場合は合計[8:01:03] のうち[7:37:13]を授業外で学習している。これらの受講生は総学習時間の中の授業外の学習時間の占める割合が非常に高く、授業外でも自主的に学習に取り組んだと言える。すべてレベルⅠの受講生である。聴解コースでも S-1、S-2、S-4 の 3 人はこのタイプに分類されている。よって、両コースにおいて授業外でも学習に取り組んだことを示している。

次に「授業時間内と授業時間外の両方で学習した人」は、受講生 S-7、S-9、S-11、S-12、S-13 の 5 人である。時間の差はあるがある程度学習している。聴解コースでもこのタイプに分類された人は S-11 だけである。

S-7、S-9、S-12、S-13 の 4 人は、聴解コースにおいては授業外学習時間がゼロであるが、語彙コースにおいてはある程度学習していて、タイプが異なる。S-5 は語彙コースでは授業外学習はゼロであるが、聴解コースの学習は授業外の学習時間の方が長いタイプに分類される。S-6 は、語彙コースでは授業外学習はゼロであるが、聴解コースでは、両方で学習している。

聴解コースの場合[22]は、レベルⅠでは 5 人中 4 人が授業外で学習しているが、レベルⅡ、Ⅲについては授業外で学習したのは 8 人中 2 人だけで、授業外で学習したのは主にレベルⅠの受講生である。しかし、語彙コースの場合は授業外学習をした人とあまりしない人が全体に渡って分布し、多様である。よって、語彙と聴解コースの学習は個人によって取り組みが異なると言える。

6. 指定ユニットと指定外ユニットの学習分析

6.1　レベル間の比較

この授業では、毎回学習するユニットを 1 つ指定した。さらに学習推奨ユニットを毎回 1 つリストに加えた。授業内では指定ユニットの学習が終了したら他のユニットやコースを自由に学習できる。退出も自由[23]とした。

ここでは、受講生が語彙コースの指定ユニットにかけた学習時間と指定外ユニットにかけた学習時間から取り組み状況を分析する。指定外ユニットの学習は自主学習とみなすことにする。

まず、それぞれのユニットにかけた時間をレベル間で比較する。表 7 は受講生の授業期間中の語彙コースの指定ユニットと指定外ユニットの総学習時間、及び、合計をレベル別に集計して 1 人当たりの平均値を算出したものである。

表 7：語彙の指定・指定外ユニット学習時間（レベル別）

（時間:分:秒）

レベル	指定ユニット総学習時間	指定外ユニット総学習時間	合計
Ⅰ	5:09:54	0:42:47	5:52:41
Ⅱ	4:47:24	0:43:19	5:30:43
Ⅲ	3:43:29	0:36:22	4:19:52

指定ユニットの総学習時間は、レベルⅠが一番長く、[5:09:54]で、次がレベルⅡで[4:47:24]である。レベルⅢが[3:43:29]で一番短い。指定外ユニットの総学習時間は、レベルⅡが一番長く、[0:43:19]である。次がレベルⅠで[0:42:47]、レベルⅢが[0:36:22]で一番短い。指定ユニットの総学習時間のレベル間差はそれほど大きくない。

聴解コースの場合[24]は、指定ユニットの学習はレベルⅠが一番長く、次にレベルⅡ、レベルⅢの順である。この順序は語彙コースの学習と類似している。しかし、聴解コースの学習では、指定外ユニットの学習時間自体は語彙コースの学習時間よりかなり短いが、レベルⅠの学習時間がレベルⅡ、レベルⅢの約 3 倍であり、レベル間の差が大きい。

次にそれぞれのユニットの学習回数をみる。表 8 は受講生の授業期間中の語彙コースの指定ユニットと指定外ユニットの総学習回数、及び、これらの合計をレベル別に集計して 1 人当たりの平均値を算出したものである。

表 8：語彙の指定・指定外ユニット学習回数（レベル別）

レベル	指定ユニット学習回数	指定外ユニット学習回数	合計回数
Ⅰ	24.8	6.4	31.2
Ⅱ	34.7	14.8	49.5
Ⅲ	26.5	8.5	35.0

指定ユニットの学習回数はレベルⅡが 34.7 回で一番多い。聴解コースの学習回数もレベルⅡが一番多く、この点は類似している。

指定外ユニットの学習回数はレベルⅡが 14.8 回で一番多い。次はレベルⅢで 8.5 回、一番少ないのがレベルⅠで 6.4 回である。個人の学習履歴を見ると、学習回数の 8 割以上は異なるユニットの学習をしている。よって学習回数からみると、レベルⅡは多くの種類の指定外ユニットに取り組んだ可能性が高い。この点の詳しい考察は別稿としたい。

6.2　個人別の特徴

ここでは、指定外ユニットの学習には、取り組んだ人とそうでない人がいる。ここでは次の 3 タイプ[25]に分類して学習状況を考察する。指定外ユニットの総学習時間が 32 分以上、学習回数 3 回以上の人を「指定外ユニットを自主的に学習にした人」、指定外ユニットの学習時間がゼロ、または、30 秒未満で閲覧のみと考えられる人を「指定ユニットだけを学習した人」、指定外ユニットの学習時間が 30 秒以上、32 分未満の人を「指定外ユニットの学習を少し学習した人」と分類する。自主的学習者の分類基準は語彙コースの総学習時間の平均値[5:28:16]の 1 割（約 32 分）以上の学習時間で、学習回数 3 回以上の人とする。

表 9 は受講生の授業期間中の語彙コースの指定ユニットと指定外ユニットの総学習時間、及び、これらの合計時間を算出したものである。表 10 は受講生の授業期間中の語彙コースの指定ユニット、指定外ユニットの総学習回数を表している。

表 9：語彙の指定・指定外ユニット学習時間（個人別）

（時間:分:秒）

受講生番号	指定ユニット総学習時間	指定外ユニット総学習時間	合計時間
S-1	5:14:45	0:00:00	5:14:45
S-2	9:39:22	0:00:09	9:39:31
S-3	5:10:19	0:32:09	5:42:28
S-4	5:00:38	3:00:25	8:01:03
S-5	0:44:24	0:01:13	0:45:37
S-6	5:02:24	1:52:54	6:55:18
S-7	5:39:27	0:56:27	6:35:54
S-8	3:02:30	0:51:41	3:54:11
S-9	3:33:04	0:27:48	4:00:52
S-10	2:43:32	0:08:17	2:51:49
S-11	8:43:25	0:02:46	8:46:11
S-12	4:20:18	0:37:22	4:57:40
S-13	3:06:40	0:35:23	3:42:03
平均	4:46:13	0:42:03	5:28:16

表 10：語彙の指定・指定外ユニット学習回数（個人別）

受講生番号	指定ユニット総学習回数	指定外ユニット総学習回数	合計回数
S-1	26	0	26
S-2	27	1	28
S-3	22	5	27
S-4	33	25	58
S-5	16	1	17
S-6	36	25	61
S-7	33	23	56
S-8	23	19	42
S-9	47	13	60
S-10	17	6	23
S-11	52	3	55
S-12	35	10	45
S-13	18	7	25
平均	29.6	10.6	40.2

まず、「指定外ユニットを自主的に学習にした人」として、S-3 、S-4、S-6、S-7、S-8、S-12、S-13 の 7 人が挙げられる。この中で S-4 は指定外ユニットの総学習時間が一番長く[3:00:25]である。総学習回数は 25 回で受講生全体の最大値である。よって、語彙コースの学習にかなり自主的に取り組んだと言える。この受講生は聴解コースでも指定外ユニットの総学習時間が[3:30:40]と非常に長く、合計時間[10:22:48]のうち約 3 分の 1 の割合で指定外ユニットの学習をしている。さらに指定外ユニットの総学習回数は 19 回で、指定ユニットの 20 回と同じぐらい学習している。したがって、両方に自主的に取り組んだことを示している。S-8、S-13 もこのタイプである。

次に指定外ユニットの総学習時間が長いのは S-6 で、[1:52:54]である。総学習回数は 25 回で受講生全体の最大値である。この受講生が学習した語彙の指定外ユニット履歴をみると 25 回中 20 回を異なるユニットを学習している。S-6 の受講生は、聴解コースの学習において指定外ユニットの総学習時間がゼロで、指定ユニットだけ学習している。よって、語彙コースの学習に関しては、聴解よりも自主的に取り組んだと言える。S-3 もこのタイプである。

次に「指定ユニットだけを学習した人」をみる。受講生 S-1、S-2 は指定外ユニットの総学習時間がゼロ、または 30 秒未満で、指定外ユニットの学習はしていない。指定ユニットの総学習時間は、S-1 が[9:39:22]で、受講生中で最大である。S-2 も[5:14:45]で 3 番目に長い。よって、指定外ユニットの学習はしなかったが、指定ユニットの学習に集中して取り組んだと言える。聴解コースにおいてもこの 2 人は指定外ユニットの学習を全くしていない。よって、両コースにおいて指定ユニットの学習だけに取り組んだと言える。

そして、「指定外ユニットの学習を少し学習した人」をみる。受講生 S-5、 S-9、 S-10、 S-11 の 4 人は、指定外ユニットの学習をある程度は行ったと思われる。しかし、指定外ユニットの学習時間が 30 秒以上 32 分未満である。聴解コースにおいても S-9、 S-11 の 2 人はこのタイプに分類されている。

この他のタイプ S-7 と S-12 は、語彙の学習は自主的に行ったが、聴解コースは少し学習したタイプである。13 人中 7 人は同じタイプ、3 人は反対のタイプに分類された。概して語彙コースを自主的に学習した人は聴解コースも学習し、語彙コースを自主的に学習しなかった人は聴解コースも自主的に学習しなかった。また、語彙だけ自主的に学習した人、聴解だけ自主的に学習した人も見られた。学習への取り組みは多様である。

レベル別にみると、レベル I は「指定外ユニットにかなり自主的に取り組んだ人」、「指定ユニットだけを学習した人」、「指定外ユニットを自主的に学習にした人」と「指定外ユニットの学習を少し学習した人」の 3 タイプが混在する。レベルⅡは「指定外ユニットを自主的に学習にした人」と「指定外ユニットをある程度は学習した人」の 2 つのタイプに分かれる。レベルⅢは二人とも「指定外ユニットを自主的に学習にした人」である。これらは学習回数からもからも裏付けられる。

聴解コースにおいては、レベル I は指定ユニットだけを学習した人が大半を占め、レベルⅡは指定外ユニットをある程度は学習したが、主に指定ユニットの学習に専念した人が多い。レベルⅢも指定外ユニットにはある程度取り組んだ人に分類され、レベルによる傾向が顕著である。よって、3 つのタイプが全体に分布する語彙コースとは異なることが分かった。

7. まとめ

本研究では、e-Learning による語彙コースの学習について、全体の学習時間、授業内・授業外での学習時間、指定ユニット・指定外ユニットの学習時間について受講生の学習履歴をもとに明らかにし、聴解コースの学習状況（稲葉, 2013 印刷中）と比較した。その結果、以下のことが明らかになった。

語彙コースの総学習時間・総学習回数は共に聴解コースの約 2 倍で、受講生は語彙コースの方に積極的に取り組んだと思われる。

授業内の学習時間が一番長いのはレベルⅡで、授業外の学習時間が一番長いのはレベル I である。レベル I では授業外の学習時間の方が長い受講生が多い。この傾向は聴解コースと類似している。しかし、語彙コースでは、聴解コースの授業外学習がゼロのレベルⅢの受講生が授業外学習に取り組んでいる点が異なる。

個人別にみると聴解コースの場合は授業外で学習した人は主にレベル I に集中しているが、語彙コースの場合は授業外で自主学習した人が全体に分布している。

指定外ユニットを自主的に学習した人の割合は高く、大半の学生が多かれ少なかれ自主的に学習に取り組んでいる。これに対して、聴解コースではレベルⅡを中心に指定外ユニットをある程度は学習しているが、概して自主的な取り組みは少ない。

全体的な学習取り組みをみると、レベルが低い受講生は概して学習時間が長い点では類似している。一方、聴解コースではレベル I を除いて比較的類似した傾向が見られたが、語彙コースでは受講生全体にレベルを問わず多様な取り組みが見られる。

8. ディスカッション

学習状況調査の結果から、語彙コースの総学習時間は聴解コースよりも長く、受講生はこの授業では聴解よりも語彙の方に学習時間をかけたことが分かった。アルク

教育社によれば、このプログラムの 1 ユニットの学習時間の目安は語彙コースが 10～20 分、聴解コースが 20～30 分とされている。もちろんこれは各コースのすべてのステップをガイダンス通りに学習すると仮定した場合であるが、聴解コースの方が語彙コースよりも長く設定されている。本授業では指定したユニット数は聴解、語彙コース共に 11 ユニットである。しかし、受講生の指定ユニットの学習時間、指定外ユニットの学習時間共に聴解コースより長かった。これは、受講生が語彙コースの学習に積極的、かつ、自主的に取り組んだ証拠と言えよう。

聴解コースの学習においては、日本語能力試験 4～2 級程度を全員に指定ユニットとしたので、レベルⅠの受講生には難しいユニット、逆にレベルⅢの受講生には簡単な 4 ユニットが含まれていた。一番多く自主学習が見られたのがレベルⅡであったので、このレベルの受講生に適した学習内容だった可能性は高い。

語彙の学習は、受講生の日本語のレベルに関わらず自由に取り組める。自分に興味をもった分野の語彙を選び学習することが容易である。よって、多くの受講生の学習を促したのではないかと思われる。

稲葉（2012b）では、この e-Learning への取り組み全体を通じて、受講生は自分の日本語のレベルがどのぐらいかを認識し、自分にとってどのような日本語学習が必要かを考えるよい機会となったという事後の感想を報告した。語彙学習に関する感想をここでさらに分析すると、自分に必要な分野の語彙はどれかをメニューを見て選択する作業を通じて、自分に不足する知識、今後必要な語彙は何かを考える機会となり、コース内での各ステップの練習においては、各々が漢字学習の必要性、読み方の学習の必要性、発音の正確さを上げる必要性を認識したということがわかった。もちろん、これらの結果はこの授業に参加した受講生の集団が教師の管理下で、この学習システム（ALC NetAcademy2）を使って語彙コースを学習した場合についてのみ言えることであり、他のレベルの学習者や他のシステムを用いてさらに追究していく必要があると思われる。

9. おわりに

本研究では、主に学習時間を中心とした分析から学習者の日本語 e-Learning への取り組みについて考察した。しかし、アクセス時間内の学習の質を考慮に入れる必要があるが、今回は情報を収集することができなかった。今後はアンケート調査等を導入し、学習の状況をより詳しく把握する工夫ができればと思う。そして、どのぐらいの時間の学習をしたら、どのような学習成果があるのかという学習効果の検証も課題である。Blake (2011)は、興味をもって自分から学習教材を活用して自律的に取り組むことが学習効果を上げると述べている。今後は学習者の学習したコンテンツに関する考察も行い、どのような教材内容に興味をもったか、どのような形態の練習（クイズ、発音練習、語彙リスト作成等）を行ったか、どのレベルの教材に取り組んだか等を詳しく調べたいと考えている。そして、e-Learning をはじめとするオンラインによる外国語学習を自律学習としてどのように導入するか、どのようにクラス管理[26]するか、さらに対面式授業とどのように関連づければ効果的であるかを探り、日本語教育に役立てたいと思う。

注

1 アルク教育社の学習システム

2 Cotterall (2008)によれば、自律学習とは、学習内容を自分で選択するところから始め、学習計画、学習、振り返り等に至るまでのすべての過程を自分で管理して行うこととしている。本研究では授業外での学習、指定外ユニットの学習のみを指す場合、「自主学習」という用語を用いることにする。

3 稲葉(2013)の聴解コースの分析のデータと比較する。

4 http://www.alc-education.co.jp/academic/net/actual.html

5 ALC　NetAcademy2 の前のバージョンのプログラムである。

6 レベルⅠ～Ⅲの説明は 3.2 参照。

7 ユニット番号: 005/023/027/026/032/235/034/091/092/038/048

8 ユニット番号は 025/033/088/093

9 問題に正解するとポイントが加算され、学習者同士でポイントを競い合うことも可能である。クイズで出題されていない関連語彙を合わせると約5,300語を搭載し、幅広い語彙の学習ができる。

10 ここでいう「一斉学習」とは、受講生が授業の時間帯に教室に集まり、e-Learning に取り組むことを指す。聴解、語彙等のプログラムに取り組む時間は限定しない。自分が必要思う時間だけ練習に取り組むこととした。したがって取り組み時間は個々の受講生によって異なる。

11 [　　]内の数字は[時間:分:秒]を表す。

12 稲葉(2013)の表 2「聴解の総学習時間（レベル別）」のデータによる。

13 稲葉(2013)の表 3「聴解の総学習時間（個人別）」のデータによる。

14 授業に出席しなくても、e-Learning は授業外で取り組める。よって、出欠に関わらず登録した受講生は分析対象に含める。

15 稲葉(2013)の聴解コースの分析のデータと比較する。

16 稲葉(2013)の表 4「聴解の授業内・授業外学習時間（レベル別）」のデータによる。

17 稲葉(2013)の表 5「聴解の授業内・授業外学習回数（レベル別）」のデータによる。

18 稲葉(2013)の表 4「聴解の授業内・授業外学習時間（レベル別）」のデータによる。

19 稲葉(2013)の表 5「聴解の授業内・授業外学習回数（レベル別）」のデータによる。

20 稲葉(2013)の表 6「聴解の授業内・授業外学習時間（個人別）」のデータによる。

[21] この分類方法は稲葉(2013)の聴解コースの分析でも用いた。
[22] 稲葉(2013)の表 6「聴解の授業内・授業外学習時間（個人別）」のデータによる。
[23] 実際には退出した受講生はいなかった。
[24] 稲葉(2013)の表 8「聴解の指定・指定外ユニットの学習時間（レベル別）」のデータによる。
[25] 稲葉(2013)の聴解コースの分析でも類似の方法を用いている。
[26] クラス管理と学習履歴の利用については尹他(2007)で考察されている。

謝　辞

日本語ネットアカデミー2011 の実施にあたっては、アルク教育社の虎澤将人氏、本学小塚良孝氏、小川知恵氏よりシステムの利用法や管理運営等に関する指導や助言をいただきました。本学情報処理センターの佐合尚子氏をはじめとするスタッフの方々には教室の機器の準備や利用でお世話になりました。日本語教育コース 3 年生の方々にはチューターとして授業補助をお願いしました。査読者の方々には有益なコメントを数多くいただきましが、筆者の力不足から十分に活かせませんでした。これらのご協力やご指導のお陰で本稿をまとめることができました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

引用文献

稲葉みどり(2012a).「e-Learning による日本語学習の効果的な導入法の考察－学習履歴の分析から」.『日本語教育国際研究大会名古屋 2012 予稿集第 1 分冊 』,221.

稲葉みどり(2012b).「日本語ネットアカデミー2011-教師の管理下での e-Learning の分析」.『教養と教育』, 12, 17-26.

稲葉みどり（2013 印刷中).「留学生の e-Learning への取り組みの考察－ALC　NetAcadeny2 の日本語聴解コースの場合－」.『愛知教育大学研究報告.人文・社会科学編』, 62.

江口誠（2012).「e-learning 副教材案における TOEIC への影響（第 3 章 3.3）」.愛知教育大学外国語教育講座（編）,『e-learning と TOEIC を活用した英語教育－教員養成の立場から－』, 63-69.　名古屋:中部日本教育文化会.

小川知恵（2011).「自主学習としての e-learning システムの検討：パイロット調査から今後の導入に向けて」.小塚良孝・藤原康弘（編）,『教員養成における英語教育のこれから－小学校外国語活動を見据える－』, 103-115. 名古屋:中部日本教育文化会.

小川知恵・藤原康弘（2011).「教員養成大学における大学生の学習者自律度と他者依存度」.小塚良孝・藤原康弘（編）,『教員養成における英語教育のこれから－小学校外国語活動を見据える－』, 89-102.　名古屋:中部日本教育文化会.

小塚良孝（2012).「愛知教育大学における e-learning と TOEIC の利用の現状と課題（第 1 章）」.愛知教育大学外国語教育講座（編）,『e-learning と TOEIC を活用した英語教育－教員養成の立場から－』, 1-11.　名古屋:中部日本教育文化会.

佐藤勢紀子（2012). 「日本語教育における e-learning 利用の可能性－ALC NetAcademy 導入の事例から－」.『ウェッブマガジン留学交流』, 2012 年 2 月号, Vol. 11.

佐藤勢紀子,上原　聡,加藤　弘,福島悦子,中村　渉(2007).「日本語教育における Web 利用の現状と課題 －カリキュラムおよび運営方法の改善に向けて－ 」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』, 2, 297-310.

佐藤勢紀子,虫明美喜,佐藤保子,吉本啓（2005). 「オンライン日本語語彙コースの開発」『メディア教育研究』, 2 (1), 113-120.

田口達也（2012a).「自ら学ぶことについて：自主学習と自律学習における研究, 総括（第 2 章 2.4）」.愛知教育大学外国語教育講座（編),『e-learning と TOEIC を活用した英語教育－教員養成の立場から－』, 42-43.　名古屋:中部日本教育文化会.

田口達也（2012b).「自ら学ぶことについて：自主学習と自律学習における研究,自主学習に向けての心理的メカニズム（第 2 章 2.2）」.愛知教育大学外国語教育講座（編）,『e-learning と TOEIC を活用した英語教育－教員養成の立場から－』, 13-28.　名古屋:中部日本教育文化会.

藤原康弘・小川知恵(2011).「TOEIC スコアに与える個人差要因の影響：外発的動機づけ、授業外英語学習の効果」.小塚良孝・藤原康弘（編）,『教員養成における英語教育のこれから－小学校外国語活動を見据える－』, 65-88. 名古屋:中部日本教育文化会.

尹［テイ］勲・水町 伊佐男・張 超（2007）.「日本語 e-Learning 実践のための教師支援システムの開発－クラス管理と学習履歴利用に焦点をおいて」『広島大学日本語教育研究』, 17, 99-106.

Blake, R. (2008). *Brave new digital classroom: Technology and foreign language learning*. Washington, DC: Georgetown University Press.

Blake, R. (2009).The use of technology for second language destance learning. *Modern Language Journal, 93*, 822-835.

Blake, R., Willson, N., Pardo Ballester, C., & Cetto, M.

(2008). Measuring oral proficiency in distance, face-to-face, and blended classrooms. Language learning and Technology, 12 , 114-127.

Blake, R. J. (2011). Current trends in online language learning. Annual Review of Applied Linguistics, 31, 19-35.

Chappelle, C. A. (2008). Technology and second language acquisition. Annual Review of Applied Linguistics 27, 98-114.

Chappelle, C. A. (2009). The relationship between second language acquisition theory and computer-assisted language learning. Modern Language Journal 93, 741-753.

Cotterall, S. (2008). Autonomy and language learners. In C. Griffiths (Ed.), Lessons from good language learners (pp. 110-120). Cambridge: Cambridge University Press.

【連絡先　稲葉みどり
E-mail: mdinaba@auecc.aichi-edu.ac.jp】

Comparative Analysis of Learning Histories between Online Japanese Vocabulary and Listening Courses

Midori INABA

Department of Teaching Japanese as a Foreign Language, Aichi University of Education

Abstract

This paper investigated how the international students utilize and benefit from the online Japanese-language program called "ALC NetAcademy2" in and outside the classroom. The author practiced the pilot e-Learning class utilizing this course under the management of the instructor. This course includes a vocabulary and a listening course. This study investigated the students' learning histories of the vocabulary course and compared the results with those of the listening course.

The background of the study is the comparative study on online language learning with face-to-face instruction by Blake (2008; 2009). It shows that the students who took all or part of their classes online performed better than those in traditional face-to-face learning environments and those in purely online courses. According to this study, the main factor which affected this result is the amount of time they worked on their task, which is not directly addressed the issues of online language learning.

The medium stimulates students to spend more time engaged with the second language material, which ultimately promotes greater learning.

A comparative analysis of the vocabulary course and the listening course revealed that (1) the students spent more time on vocabulary learning than listening, (2) the lower level students are engaged in the course longer than the higher level students, and (3) more students work self-directed on the vocabulary course than listening course. These results indicated that the vocabulary course inspired the students to spend more time on learning. Since this research is only based on the analysis of the amount of time the learners engaged in the courses, the quality of the work and task should be taken into consideration to assess their autonomy. Further research is called for.

Keywords

e-Learning, ALC NetAcademy2, listening, vocabulary, Autonomy